

一般来場者・高校生・学部生 用

実践女子大学所蔵 源氏物語・和歌コレクション展
— 文庫（ふみくら）をひらく —

展示品 解説



本展示の趣旨

『源氏物語』のちから

『源氏物語』は平安時代の中ごろにつくられた長編の物語です。女性によって書かれた長編物語としては世界最古ともいわれています。日本国内で最も有名な古典文学作品であるばかりでなく、世界中で愛読されているベストセラー作品でもあります。原文を読んだことがない方でも、大和和紀による漫画『あさきゆめみし』や、宝塚歌劇団による舞台化、映画やアニメーションなどで『源氏物語』と出会った方も多いことでしょう。現在の大河ドラマも『源氏物語』に取材したものであり、令和に至るまでその人気は色褪せていません。

現在のような複写や撮影技術がなかった時代、作品を読みたい、自分の本棚に並べておきたいと思ったときは、人の手で書き写すしかありませんでした。紙と筆と墨を用意して、一文字ずつ書き写していくのです。短い作品であればまだよいのですが、『源氏物語』のような長編物語（文量は原稿用紙2300枚以上とも）を書き写すには気の遠くなるような労力を要します。さらに紙はたいへん高価なものでしたので財力も必要でした。1000年以上前につくられた『源氏物語』を現在でも読むことができるのは、大変な思いをしても書き写して伝えてきた先人たちのおかげです。それは人を魅了し続ける『源氏物語』がもつ卓越したちからを証明してもいます。

書き写されて伝わる『源氏物語』

成立当初の『源氏物語』がどのような姿であったのか、またどのような内容、本文であったのかは判然としません。作者のひとりとされる紫式部が書写した『源氏物語』が、残念ながら1丁（現在の1ページ）も、わずか1行すら、残っていないからです。鎌倉時代のはじめ頃に書写されたと推定される『源氏物語』の写本が一部の巻だけ残っていますが、成立当初の『源氏物語』と同じかどうかは分かりません。

『源氏物語』の写本を読みくらべてみると、どの写本も必ずどこかに違いがあり、現在のコピーのように全く同じ姿の写本を探し出すことが、実はとても難しいのです。一文字ずつ書き写して作られたのですから当然かもしれません。加えて、物語を読む読者たちが、物語の内容に手を加えながら書き写していった時代もあった、ともいわれていますので、違っていても当たり前です（現在の著作権のような考え方を日本古典文学に当てはめることは適当ではありません）。

『源氏物語』の最初の姿で読んでみたいという気持ちもわかりますが、どの写本もみんな違い、それぞれに個性があるという事実も同じように大切にしてほしいと思います。ストーリーは同じでも、細かな心情描写や和歌に込められた想いなどが、写本によって違いますから、読んでいる最中に、また読了後に、私たちの胸に湧き出る想いも、読むときに選んだ写本によって変わってくるからです。お気に入りのキャラクターの新たな一面を発見できるかもしれません。原型にこだわりすぎず、こういった写本のバリエーションも楽しんでもいただきたいと思います。

本展示のねらい

以上のような考えをふまえ、本展示では、数多くある『源氏物語』写本のバリエーションのうち、鎌倉時代末期頃に書写された、すなわち約700年ほど前に書写されたものを含む、七種類の『源氏物語』の写本をご用意しました。筆跡や料紙といった、作品の外側にあるものの違いにもぜひ注目してください。

また、『源氏物語』を深く読むうえで欠くことのできない、和歌に関わる古典籍も展覧しています。重要文化財を含む著名な写本だけでなく、学術的価値を有しながら公開されていなかった資料を中心に集めました。本学が取り組んでいる文理融合型研究の成果も示しています。

8000点を超える貴重古典籍を所蔵する機関の責務として、各文庫の扉を改めてひらき、日本古典籍の価値を社会にひらく。これが本展覧の目指すところです。国文学科の学生の助力を得ながら、『源氏物語』や和歌を愛する方々に分かりやすく伝わるように、見どころや内容を解説に示す工夫をしました。展示品とあわせて本解説もご堪能ください。

(本学国文学科 舟見一哉)

解説および編集：

本学国文学科・准教授

舟見一哉

解説分担執筆：

文芸資料研究所教授

上野英子

本学国文学科助教

軽部利恵

国文学科 博士前期課程1年

中村仁美

国文学科4年 中古文学ゼミ

野口友愛

//

新村唯

国文学科3年 中古文学ゼミ

三浦遥

イラスト：

国文学科4年 中古文学ゼミ

青木まどか

国文学科3年 中古文学ゼミ

鈴木七音

国文学科2年

関根汐音

展示企画・立案・設置・運営

国文学科3・4年

中古文学ゼミ有志



第一章 『源氏物語』の写本たち ー多彩な筆跡、多様な本文ー

この章では7種類の『源氏物語』を展示しました。見どころを解説します。



No.1 は、^{きりつぼ}桐壺巻の内容を伝える^{こひつぎれ}古筆切(*1)です。

帝と桐壺の更衣のあいだに生まれた男御子、『源氏物語』の主人公である源氏の君が、十二歳で元服する直前の場面です。桐壺の更衣が死去してのち、更衣とよく似た先帝の第四皇女が帝のもとに入内します。彼女は^{ふじつぼ}藤壺（^{ひぎょうしや}飛香舎）に住みました。源氏の君はこの藤壺に亡き母の姿を重ねつつ親しく過ごします。帝からの厚い寵愛をうけた二人をみて、人々は源氏の君を^{ひかるきみ}「光君」と呼び、藤壺を「輝く日の宮」と呼びました。——『源氏物語』のなかで、源氏の君が最初に「光る君」と呼ばれる有名な場面です。

ところで、NHK大河ドラマ「光る君へ」公式サイトに、制作統括をつとめる内田ゆき氏の次のコメントが載っていました。内藤さんがご覧になったのは、ちょうどこの場面だったのかもしれませんが。

あるとき『源氏物語』を読んでいて「光る君」という言葉を見つけました。もちろん『源氏物語』の大河ドラマではないので、そのままタイトルにするわけにはいきませんが、でも、『源氏物語』を生み出した人・紫式部には、きっと「光る君」に強い思いがあったはずだと思ったんです。もしかしたら、それは光源氏のモデルの一人といわれている藤原道長への気持ちかもしれません。誰かに対して想（おも）いをぶつきたいということが、紫式部の作家としての原動力なのではないかと考えたときに、「光る君」のあとに「へ」をつけることで、「主人公の一番大切な人への想いが描かれているドラマですよ」ということがお伝えできるのではないかと思います。

（「何を求めて生きるのか」は、いつの時代も変わらない」2024年1月4日）

展示品は、**鎌倉時代末期～南北朝期ごろ、およそ700年前に書写されたと推定されます**。もともとはNo.2や3のような書籍のかたちをしていましたが、伝来の過程で一枚の紙片（古筆切）となり、掛物のかたちに変えられました。



No.2 は、^{すえつむはな}末摘花巻の一帖です。

本のかたちは正方形（柀形本と呼びます）。本の装訂は^{れっちょうそう}列帖装といい、「紙を複数枚（五～十枚程度）重ねて二つ折りにしたものを二つ以上並べ、糸などで綴じたもの」です(*2)。こちら、**鎌倉時代末期～南北朝期ごろ、およそ700年前に書写されたと推定されます**。書写された時代は**No.1と同時期ですが、筆跡は異なります**。つくられた当初は五十四帖すべてが揃っていたのかもしれませんが、いまはこの一帖しか見出せません。どこにいったのでしょうか…？

1. 狭義には平安～鎌倉時代に書写された古い筆跡のことを「古筆」という。古筆で書かれている古写本の一部が、破損したり切断されたりして紙片となったものを「古筆切」という。

2. 古典籍の装訂については、国文学研究資料館編『本 かたちと文化 古典籍・近代文献の見方・楽しみ方』（勉誠社、2024年）が分かりやすく参考になります。

○末摘花巻のあらすじ○

「末摘花」は光源氏が亡き夕顔を恋しく思い、あのような女性に出会いたいと願うところから始まります。ちょうどその頃、大輔命婦が故常陸親王の姫君についての噂を持ち出します。彼女は一人寂しく琴だけを相手に過ごしていると聞きつけ、源氏は是非会いたいと手引きを依頼します。

実際に姫君の住まいに行つて琴の音を聞いてみるも、命婦が早々に格子を下ろして音色が中断されてしまい、それによつて源氏は余計に姫君へ心を寄せていきます。

そのまま住まいを出てみると、何やら物陰に男性の姿が。それはなんと頭の中將でした。源氏と共に宮中を出た後にどこへ行くのか気になり、付けて行つたようです。二人は競うように姫君へ文を送り、さらに思いを募らせていきます。

半年経つても思うような反応が貰えない源氏は痺れを切らし、命婦へ手引きを催促します。やつとのもので対面しても姫君は恥ずかしがつて会話もままならず、命婦が部屋火を消したせいで顔も見られずにその夜は終わってしまいました。本来であれば朝に送るべき後朝の文を夕方に送つても文句は言われず、姫君からの返歌もセンスが良いとは言えないものでした。

それから源氏は行幸の準備に忙しく訪問を疎かにしていましたが、ついに住まいへ向かいます。屋敷を覗くと雪の夜であるにもかかわらず、女房達が貧しさのあまり十分に寒さを凌げずにいる様子を目にします。

そして夜が明け初めて姫君を目にすると、想像もしていなかった姿が。身長は高く背中曲がり、何より鼻は長く伸びて先が赤く色づいています。痩せこけて肌の色も白く、着ている衣も似つかわしくありません。源氏は何か言おうとしても言葉が出ず、ただ驚くばかりでした。

源氏は姫君についてこのような歌を詠んでいます。

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖に触れけむ

これは先が赤く染まっている姫君の鼻と末摘花を掛けた上で、姫君と関係を結んでしまったことを後悔している歌です。しかし、源氏はこの歌を詠むよりも前に、末摘花へ生活の援助を続けていくことを決めます。この二人はその後恋人ではなくとも、後盾のような形で関係が続いていくことになります。

(国文学科3年 中古文学ゼミ 三浦遥)

展示した場面は、源氏が末摘花を思い浮かべながら赤い鼻の女性と自分の絵を描いて、紫の上に見せているところ。源氏は自分の鼻にも赤色を塗りつけます。それをみた紫の上は大笑い。源氏十九歳のときの一コマです。



No.3 は、^{すま}須磨巻の一帖です。

これも柁形の列帖装で、やはり、鎌倉時代末期～南北朝期ごろ、およそ700年前に書写されたと推定されます。No.1ともNo.2とも、同時期の写本ですが筆跡は異なります。表紙は後世になって付けられたものですが、金箔糸（平金糸）を用いて文様を織り出した、豪華な金欄きんらんです。

展示した右の丁（ページ）は、源氏が須磨へ退去した後に行われた宮中での管弦の催しで、朱雀院がこぼした一言からはじまります。「とても物足りない。なにごとも光なき心ちもするかな（何をしても光が消えたように思えるよ）」という言葉は、「光る君」と呼ばれた管弦の名手である源氏の不在を嘆く言葉です。左の丁（ページ）は、場面が変わって須磨にいる源氏の様子。

『古今和歌集』の和歌「木の間より漏りくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり」を引きながら、もの寂しい須磨の秋の情景が描かれています。

○須磨巻のあらすじ○

対立している右大臣家の六の君である朧月夜と関係を持つていることが露見してしまった光源氏は、都を去り須磨へ行くことを決意します。源氏は亡き葵の上の両親や東宮、藤壺の宮や花散里、密かに朧月夜にも別れを告げました。特に紫の上は別れを惜しまましたが共に須磨へ行くことは叶わず、源氏から都の邸の管理などを任せられました。

源氏がなくなった宮中では朧月夜が帝から寵愛を受け、源氏と帝の間で揺れ動く感情に苛まれていました。源氏のことを愛しているし、帝の優しさもしみじみと感じる。源氏が須磨へ行ってもなお、恋心は捨てられずにいました。

須磨の暮らして聴こえるのは波の音ばかりで寂しさは増していき、源氏は都の女性に文を書いたり良い景色を絵に描いたりしながらその寂しさを紛らわせていました。

一方、源氏の従者である良清は明石に住む入道の娘へ手紙を送ったところ、父親である入道からは是非お目にかかりたいと返事が届きます。

この入道は自分の娘を源氏の妻にし、いずれは皇后となる子が二人の間から生まれると信じていたのです。妻は罪のために須磨へ流れてきた人と娘を結婚させることに肯定的でなく、後に「明石の君」と呼ばれる娘自身も源氏のような身分の高い方と結婚することとはなく、親が死んだら自分は海の底にでも入ってしまうおうと考えているのでした。

そして年が明け春が訪れた頃、宰相となった頭の中將は、宮中に源氏がいけないことが退屈で仕方なく、ついに須磨の屋敷に來訪します。漢詩を作って夜を明かし、そしてすぐに來てしまう別れにお互い名残惜しい心持ちでした。

三月に入って祓いの儀式を行っていると、突如源氏たちに嵐が襲いました。天気が少し落ち着いて明け方に眠っていると、源氏はある奇妙な夢を見ます。それは何者かになぜ宮中へ参上しないのかと言われながら探し回られるという内容でした。それによって源氏はこの海辺の住まいを去りたいと思うようになっていきます。

(国文学科3年 中古文学ゼミ 三浦遥)



No.4は、^{さわらび}早蕨巻と^{やどりぎ}宿木巻がセットで書写された一帖です。源氏が亡くなった後の時代を描く宇治十帖の一部です。

本の形がこれまでと違って**長方形**です。『源氏物語』の写本は正方形の枡形本が多いのですが、こういった長方形（四半本と呼びます）の列帖装もあります。**鎌倉時代末期～南北朝期ごろ、およそ700年前に書写された**と推定されます。文字と文字のあいだに、朱色の墨で「○」が書かれている部分があります。これは文章の切れ目を示したものです（現在の句読点のようなもの）。

展示した場面は、宇治十帖のヒロインとして人気の高い^{うきふね}浮舟が初めて登場する場面です。宇治十帖の主人公のひとりである^{かおる}薫が、宇治の八の宮邸にて偶然居合わせた浮舟の様子を障子の穴から^{かいまみ}垣間見しています。「あやしくあらはなる心ちこそすれ（人に見られている気がします）」と言う浮舟の声に、薫は気品を感じました。そして車から降りる彼女の姿をみて、薫は「かしらつきやうたいほそやかにあてなる（頭の格好や身のこなしがほっそりとして上品だ）」と思います。それは薫が愛した亡き大君を思い出させるものでした。

○早蕨巻のあらすじ○

故光源氏の異母弟である八の宮という男が、京から少し離れた宇治で大君と中の君という2人の娘と暮らしていました。しかし、八の宮と大君は病気で亡くなってしまう、中の君は父八の宮と姉大君の死の悲しみに沈みました。その時に詠んだ「この春は誰れにか見せむ亡き人のかたみに摘める峰の早蕨」という歌が巻名「早蕨」の由来になっています。光源氏の息子である薫も大君に恋心を抱いていたため、大君の死の悲しみから立ち直ることができません。

大君がまだ生きていた頃、薫は大君から中の君との結婚を勧められていました。しかし、薫は大君との結婚を望んでいたため、中の君を光源氏の孫で天皇の息子である匂宮に紹介していました。大君の亡くなった後、匂宮から中の君と結婚して中の君を宇治から京へ移す相談をされ、薫は大君の形見として中の君を自分のものにしてあげれば良かったと後悔します。中の君が京へ移る前日、中の君の引越しの後見人となった薫は中の君と宇治の山荘で大君のことを想いしめじみと語り合います。中の君は、自分が宇治を離れることでこれまで過ごしてきた山荘が荒れ果ててしまっているのではないかと辛く思っていました。

中の君が京の二条の院へ到着すると、匂宮は自ら中の君を御車から降ろすなどして中の君を手厚くもてなします。薫は、匂宮と中の君の住む二条の院の近くの三条の院で、2人の様子を気にかけていました。匂宮が中の君を大切に扱っていることを聞き、嬉しく思う一方でやはり中の君を手放したことを後悔します。光源氏の長男である夕霧は、娘の六の君よりも中の君を先に迎え入れた匂宮を恨み、代わりに薫に嫁がせようかと考えますが薫はこれを断ります。薫が匂宮と中の君のもとを訪れると、匂宮は薫に対してよそよそしい態度を取る中の君に、お世話になったのだから親しくお話するようにと言いつつも薫と中の君の仲の良さに少し不安を抱いています。

(国文学科4年 中古文学ゼミ 野口友愛)



No.5は、**宿木巻**の古筆切です。新古今時代を代表する歌人、西行の筆跡さいぎょうと伝えますが、あくまで伝称であり、実際はもう少し後の時代、**鎌倉時代末期～南北朝期ごろ**、**およそ700年前に書写されたものであることが科学的な研究手法によって明らかにされています**。No.1～4の筆跡とはかなり違い、こちらはとても自由に紙面を使っています。

場面は、宇治十帖の主人公のもうひとりの主人公である匂宮におうみやが、中君なかのきみと薫との仲を疑う場面。No.4の宿木巻と比較すると、本文に違いが確認できます。例えば、匂宮の和歌。No.4では、

又人になれけるそでのうつりがをわがみにしめてうらみつるかな
(私以外の人と親しくしたあなたの袖に残る移り香を心から恨めしく思う)

と書かれていますが、こちらのNo.5では

また人になれけるそでのうつりがほ我身にしめておもひけるかな

と書かれています。「うらむ」と「思ふ」とでは、二人の仲を疑う匂宮の感情が大きく違います。他の写本も比較してみると、ほとんどがNo.4と同じで、No.5のような本文が見つかりません。また中君の泣く姿をみた匂宮は「われもほろほろとこぼし給ふ」のですが、No.5では「われもほろほろと涙をこぼし給ふ」となっています。どちらが正しいのだろうと考えてもよいのですが、No.5の本文ならば匂宮の気持ちはどのように解釈できるだろうかと、その本文の個性を楽しんでみてほしいと思います。

○宿木巻のあらすじ○

今上帝がまだ春宮であった頃、いち早く入内し格段に寵愛を受けていた藤壺の女御は女宮（女二宮）を一人産みますが、後から入内してきた明石の中宮には子どもがたくさんいたため圧倒されてしまっていました。藤壺の女御は女二宮が十四歳の時に亡くなり、帝は女二宮の将来を心配して薫と結婚させようと思いますが、薫はあまり乗り気ではありませんでした。匂宮も、夕霧に六の君との結婚の話を勧められますが、あまり乗り気ではありませんでした。しかし、結局薫と匂宮はそれぞれ断ることができずに婚約します。

夫である匂宮の婚約を聞いた中の君は宇治を離れて京に來たことを後悔しますが、その時すでに妊娠をしていました。薫が具合の悪い中の君を心配してお見舞いに行くと、中の君から宇治へ連れて行ってほしいと頼まれますが薫はこれを断ります。中の君が、六の君よりも身分が低いことによる自分の立場の弱さに思い悩む一方で、匂宮は六の君の想像以上の美しさに心惹かれ、六の君と結婚をしてから立場上中の君の所へ行くことが困難になっていました。薫は中の君を気の毒に思い慰めますが、恋しく思う気持ちを抑えきれずに中の君を口説いてしまいます。中の君が妊娠していることに気付いたため、それ以上のはしませんでした。中の君はやはり頼りになるのは匂宮だけであると思うようになります。匂宮は、膨らんでいく中の君のお腹を見て愛おしく思っていたところ、中の君から漂う薫の移り香に気付いて中の君を責めます。

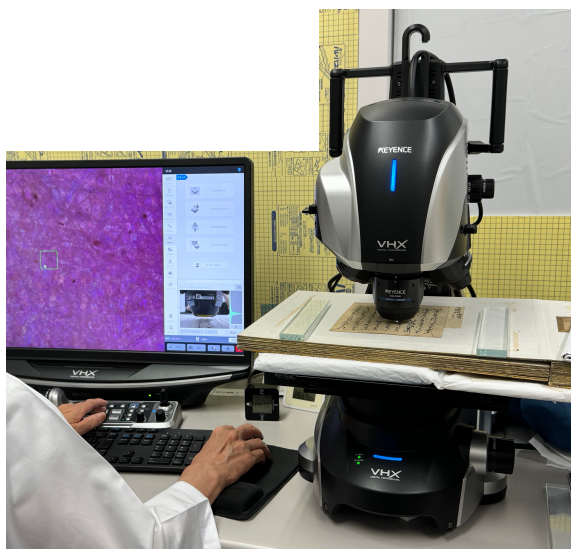
薫はその後も中の君に対してなれなれしい態度を取り、困った中の君は宇治に大君に似た異腹の妹がいることを教え、その姫君に薫の心が移ってほしいと願います。薫は初め、あまり乗り気ではありませんでしたが、宇治を訪れた際にたまたま姫君（浮舟）を垣間見ます。その姿は大君に似ていて、声や話し方は中の君に似ており、薫はすぐに浮舟を気に入り入りました。「宿木」という巻名は、薫と宇治の弁の尼が詠み交わした「宿木木と思ひ出でずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし」「荒れ果つる朽木のもとを宿りきと思ひおきけるほどの悲しさ」という歌が由来になっています。

（国文学科4年 中古文学ゼミ 野口友愛）



No.6、No.7は、室町時代に書写された『源氏物語』です。学術的価値が高く、学界では著名な写本です。

実践女子大学では、古典籍に使われている紙の素材や、紙の作られ方について、高精細デジタルマイクロスコープという顕微鏡を用いて研究をしています。展示しているパネルは、No.6の紙を500倍に拡大した写真です。一本一本の繊維をはっきりと観察できます。分析の結果、巻ごとに紙の素材が違ってくるのが分かってきました。それがなぜか考え、『源氏物語』の写本がつくられた現場を明らかにすることも、これからの国文学研究が担う新しい研究分野です。



第二章 『源氏物語』を注釈した書物たち

この章では、『源氏物語』を読むために、言葉の意味を考えたり、人間関係を整理したり、転居となる表現を探したりする「注釈書」を集めました。特に注目していただきたいのは、**No.8**の「源氏物語系図」です。

『源氏物語』は一説には500人ほどの人物が登場すると言われています。さらに、同じ人物でも官位が昇進すれば呼称が変わります。そのため、人間関係などを整理したいと考える人が出てきました。現代の小説や漫画のなかにも、こういった登場人物の関係図を書いて整理したページをもつものがあります。同じようなものとイメージしてください。展示品は室町時代の三条西実隆がつくった源氏物語系図の転写本です。この本を横に置きつつ『源氏物語』を読むととても読みやすくなります。

本のかたちにも注目しましょう。横方向に紙を貼り継いで、それを等間隔で山折り谷折りを交互に作って折りたたんだ「折本^{おりほん}」という装訂です。このかたちであれば、本を横に広げていくことで、人間関係を視覚的に捉えやすくなります。

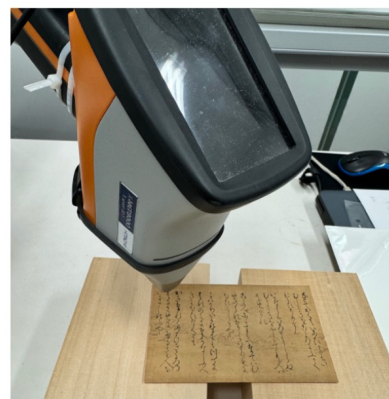


第三章 『源氏物語』の和歌

『源氏物語』には、795首もの和歌が詠まれています。最も多くの和歌を詠んだ登場人物は源氏です。和歌は何となく難しいイメージがあり、読み飛ばしてしまう人もいるようですが、それは非常に勿体無いのでやめましょう。登場人物たちは、和歌で恋をはじめて、和歌で恋を終わらせます。魂が揺さぶられたとき、みな和歌を詠んでいます。和歌の部分こそ、最も盛り上がる場面と言っても過言ではありません。各巻の巻名も、その大半は作中で詠まれた和歌に基づいて付けられています。ですから、和歌は読み飛ばさず、まずは現代語訳で意味を確認し、つぎに原文で和歌を2回ほど読んでみてください。枕詞や序詞といったレトリックなどは難しく考えすぎず、5・7・5・7・7のリズムを感じてみてください。

No.13は、鎌倉時代初期に書写された、『源氏物語』に出てくる和歌だけを抜き出した本の古筆切です。よく見ると横方向に下絵が描かれています。水辺の草を描いたものでしょう。

この下絵は銀泥（粉末状にした銀を膠水で溶いてつくる絵具）で描かれているとする見解がありますが、今回、X線金属成分分析器（HITACHI 社・X-MET8000 Optimum）を用いて調査したところ、銀を示す Ag は全く検出されませんでした。したがって、銀泥が酸化して黒く見えているのではないと考えられます。おそらく薄墨で描かれているのでしょう。



第四章 紫式部の和歌

『源氏物語』の作者のひとりとされる紫式部は、ざっと数えても100首を超える和歌を詠んでいます。それらを紫式部自身で編纂してまとめたと考えられているのが『紫式部集』です。

No.14 は、数ある『紫式部集』のなかでも特に有名な写本です。奥書（その本を書写した年月や書写者、由来などを記した文章）によると、**西暦1556年に書写された写本**であると分かります。

展示箇所は、誰とは特定できませんが男性（夫の藤原宣孝とみる説もあります）から式部のもとへ贈られた恋の和歌と、式部の返事の和歌です。男は「あなたに逢えないので、あなたを慕って思い嘆きながら夜を明かした、はっきりと夢の中であなたと逢うことさえできなかった」という意味の和歌を贈ってきました。日時は（何年かはわかりませんが）七月一日の明け方だったとあります。七月のはじめですから、ちょうど秋がはじまるころ、すなわち飽きはじめた頃だということです。式部はそれを踏まえて、次のように返事をします。

しののめの空霧わたりいつしかと秋のけしきに世はなりにけり
（夜明けの空には霧が立ちわたり、いつのまにか秋めいてきましたね）

秋めいてきた情景を詠んだ歌のようにみえますが、実際は「同じように私たち二人の仲にも飽きがきたようですね」という意味です。「秋の景色」と「飽きの気色」が掛かっています。逢えないことを嘆いて夜を明かしたとあなたは言うけれど、本当は飽きがきたから昨日は私に逢いにきてくれなかったのでしょうか？と式部は返したのです。この返事の和歌をみた男はどう思ったのでしょうか…？

このように、とてもプライベートな内容を含む和歌が『紫式部集』には和多くおさめられています。彼女の人となりや人生を知るには、この『紫式部集』を読むのが一番わかりやすいと思われます。



第五章～第八章

この章では、『源氏物語』を深く理解するためには欠かせない和歌に関わる古典籍を集めました。今回の展覧にあたり本学の文庫が所蔵する和歌資料を改めて調査したところ、学術的価値の極めて高い未公開の資料がたくさんあることがわかりましたので、その中から調査の終わったものを展示しています。ここでは著名な作品に絞って解説します。詳細は〈研究者用〉の解説に記していますので、ご興味のある方はそちらをダウンロードしてください。

『源氏物語』に出てくる和歌には、平たく言うと、お手本とした和歌がありました。特に、平安時代前期に編纂された最初の勅撰和歌集（天皇や上皇が下命して撰者に優れた和歌を選ばせて作った公的アンソロジー）である『古今和歌集』は、お手本として強く意識されていました。

No.15は、室町時代後期頃に書写された『古今和歌集』です。上質な料紙と豪華な表紙にも注目してください。

藤原定家と古典文学

『古今和歌集』の次につくられた勅撰集が『後撰和歌集』です。**No.19**は、その『後撰和歌集』を藤原定家が書写した写本の古筆切です。紹巴切という名称で知られています。もともとは書物のかたちをしていましたが、いつの日か切断されて古筆切となりました。展示品と同じ写本から切り出された古筆切（「ツレ」と呼びます）は、メトロポリタン美術館にも所蔵されています。

定家は和歌をよくしただけでなく、様々な古典文学作品を書写しました。『土佐日記』や『更級日記』など、彼が写していなければ現代まで残らなかった可能性のある作品がたくさんあります。現在の教科書や一般に市販されている日本古典文学作品のテキストの殆どは、定家が書写した写本に基づいています。『源氏物語』も同様です。定家の書写した写本は古くから尊重され、また内容も読み取りやすくもあったので、江戸時代には刊本（手書きではなく印刷された本）ともなり、広く流通しました。そういった歴史を踏まえて、定家が書写した写本に基づいてテキストが作られています。私たちは定家の手を一度通した古典文学を読んでいるのです。作品の原型に近いから選ばれているのではないことに注意しましょう。

定家の筆跡は、独特の丸みを帯びたかたちをしています。彼のこの書風は、子孫や定家を尊敬する人々に真似されて「定家様」と呼ばれる書風として確立します。古典文学を残してくれた定家に思いを馳せながら、じっくりと鑑賞してください。ちなみに、**No.32**の百人一首は、冷泉為清（1631-68）によって、家祖である定家の書風を受け継いだ定家様で書かれています。見比べてみてください。

なお、先ほども紹介した高精細デジタルマイクロスコープという顕微鏡を使って紙を分析したところ、紹巴切は再生紙を使っている可能性が出てきました。定家はエコフレンドリーな人だったのでしょうか？それとも鎌倉時代では当たり前だったのでしょうか？



えこ…。

📖 もと陰陽師、寂恵が写した本

No.20 は重要文化財に指定されている『拾遺和歌集』です。『拾遺和歌集』は第三番目の勅撰和歌集。『源氏物語』とほぼ同時期に編纂されました。

本学の『拾遺和歌集』を書写したのは、^{じゃくえ}寂恵という法師です。俗名は安倍範元。彼は鎌倉幕府に陰陽師として出仕しており、^{むねかた}宗尊親王のもとで有力な歌人たちと和歌を詠んでいました。文永三年（1266）以後に遁世して寂恵と号します。鎌倉と京都を行き来し、定家の子息たちと交流、そのころ作られはじめていた勅撰集の編纂にも関与しています。

本学の『拾遺和歌集』は、残念ながら、巻一～一〇までの上巻しかありません。下巻はいまどこにあるのか分かりません。もしかすると切断されて古筆切になっている可能性もあります。そこで調査をしてみたところ、本学の『拾遺和歌集』と同じ筆跡で書写されている、『拾遺和歌集』下巻の一部の古筆切を発見しました。それが隣に並べた **No.21** です。この古筆切は、もとは本学の『拾遺和歌集』上巻とセットだったのではないかと考えられます。ただし、文字が書かれている位置（高さ）が若干違うという問題もありますので、今後さらに研究を続けていくことにしています。

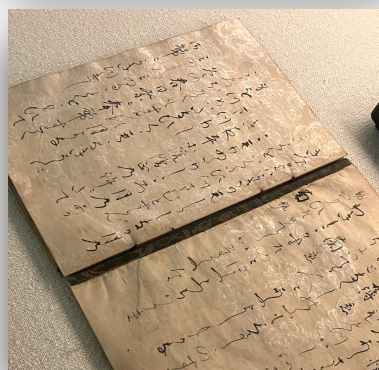
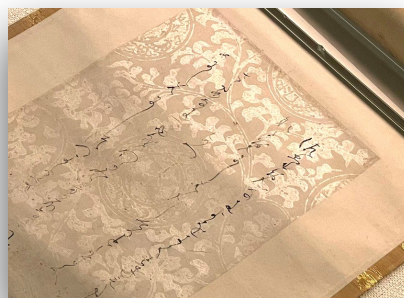
No.22～26 は、同じく寂恵が書写した『古今和歌集』の古筆切です。^{いわみぎれ}「石見切」という名称でよく知られている名物切。世界中に分散しています。すべて同じ写本から切り出されたものです。一枚一枚はパズルのピースのようなもので、それを集めていくことで元々の本のかたちを再建できます。

寂恵は何度も『古今集』を書写しています。そのひとつが書物のかたちで残っており、複製本も作られています。今回展示した古筆切と同じ部分を並べて展示していますので、筆跡の比較を試みてください。

📖 美しい料紙を鑑賞する

No.29 は、斎宮女御の和歌を書写した古筆切です。紫式部と交流のあった藤原公任（966～1041）の筆跡であると鑑定家はみていますが、江戸時代のものではないかと思われます。^{きら}雲母で文様を刷り出した美しい料紙に書写されています。展示のライトで唐草と丸文がはっきりと見えるでしょうか。

となりの **No.30** 顕輔集 も同じく唐草文などを雲母で文様を刷り出した美しい料紙に書写されています。鎌倉時代の写本とみる説もありますが、これも江戸時代のものと思われます。



ここまで解説してきたように、今回展示されている作品のなかには、本の形を留めず、一枚の紙になってしまっているものがありました。日本の古典籍のうち、平安時代に遡るものの殆どすべては、もとの本の形を保っていません。

理由の一つとして、日本に自然災害が多いことが挙げられます。地震や水害によって文化財は破損してしまいます。現在の修復技術は世界でもトップクラスですが、古代にそこまでの技術はありません。古典籍は一点ものですから、破損してしまうと当時はどうしようもなかったのです。近代の戦争による被害も大変なものでした。そこで、「この本の一部だけでも残したい」と思った人々は、傷んだ本を解体し、一ページでも残そうとしました。こうして、本から紙へ、形状を変えることになります。一枚の紙になった古典籍を古筆切（あるいは断簡）と称します。厳密には鎌倉時代頃までの筆跡に限定しますが、現在は室町時代頃までも含めています。

二つ目の理由は、いにしえの人が書いた、書・文字を愛でる日本の文化が挙げられます。平安時代の美しい文字を、自分のものにしたい、一文字だけでも欲しい、という想いは、鎌倉時代からすでにあったようです。さきほども書いたように、古典籍はすべて一点ものですし、当時は写真などありませんから、古典籍そのものを手にいれるしかありません。書き写してもいいですが、それじたいを欲しいときはどうするか？——所有者から買い取る、譲ってもらうしかありません。全部は無理でも一部分をお願いして譲ってもらうのです。権力者への献上品として、反対に権力者からの褒美として、古典籍は利用されていきます。一部分でも欲しいという欲求によって、古典籍の一部は、一枚の紙へ、ときには数行、数文字へと分割されていきました。そして人から人へ、日本から世界へと分散を繰り返しました。

この流れに拍車をかけたのが、茶の湯文化です。茶室には、季節や趣向にあった掛軸が必ず掛けられます。春のお茶席で、いにしえの人の書いた、いにしえの和歌を鑑賞しながら一服するので、数寄の極みですね。こうしてさらに分割と分散が進むことになりました。

さらに、いにしえ人の筆跡を、たくさん、できれば有名なひと全員を、時代順や身分によって分類しながら集めたい、手元に置いていつでも手軽に鑑賞したい、という想いも深くなっていきます。こうして、様々な人の筆跡をあつめたアルバムとして「古筆手鑑」が出来上がりました。室町時代頃には、嫁入り道具として、主に武家で作られていたようです。

○

このような話を聞くと、文化財の破壊じゃないかと嫌な気持ちになるかもしれません。しかし、古筆切になったからこそ、一部分でも現代に何とか伝わったのだ、という側面も否めません。一説によると、平安時代に成立した物語の実に九〇%が散逸してしまい、全く内容がわかっていません。このことを思い合わせると、平安時代の古典籍がほんの一部でも残ってくれたことは、奇跡ともいえます。一〇〇〇年以上の歴史を経て、人々に愛され続けた古筆切を間近でみることができる奇跡を、むしろ大切に、鑑賞してほしいと思います。

展示品**No.41** は本学に近年収蔵された古筆手鑑です。今回がはじめての公開です。ここでは特に鑑賞してほしい5点にしばって解説をします。

(1) 手鑑の巻頭は「伏見院筆 筑後切（後撰集）」です。鑑定通り伏見天皇（1265～1317）の筆跡であることが確認されています。内容は『後撰和歌集』です。同じ本から切り出された巻末部分が残っており、そこに「永仁二年」という記述があるので、**西暦1294年、伏見天皇が30歳頃の筆跡**とわかります。上下に藍色の繊維を漉きこんでつくられた打曇紙に、温和な筆跡で書かれています。もとの装訂は卷子本（冊子本ではなく巻物のかたち）だったようです。天皇の筆跡を「宸翰様」と呼び、伏見書の書風は「伏見院流」という流派を確立していきます。同じ『後撰集』を写しているNo.19の定家筆紹巴切とは、全くちがう印象です。

(2) 伝藤原定家筆「小記録切」は、何らかの記録を記したものの古筆切です（まだ判然としません）。No.19の解説で触れた定家様ですが、これが本当に定家の筆跡か判断に悩みます。



(3) 伝二条為藤筆「源氏物語切」は、No.1～5の『源氏物語』と同じく鎌倉時代末期～南北朝期に書写された『源氏物語』の断簡。内容は夕顔の一節です。もののけにより取り殺されてしまった夕顔の素性を右近から源氏が聞く場面です。夕顔はかつて頭中将とも愛し合っており、ふたりの間には娘がいました。古筆切の冒頭部分に、

「女にていとらうたけになん（「一昨年お生まれになりましたのは」女の子でとてもかわいらしうございます）」

とあるのがその子のことで、彼女こそ後に登場するヒロイン、玉鬘です。



(4) 伝冷泉為相筆「秋田切（鯉切とも）」は、鎌倉時代後期から南北朝頃に書写されたもの。為相の筆跡ではありません。内容は『僻案抄』（定家書いた『古今集』の注釈書）です。展示のライトでは見にくいかもしれませんが、白色の胡粉による具引き地に文様を雲母摺りしています。この古筆切と同じ写本から切り出されたものは、国宝手鑑『藻塩草』（京都国立博物館）などにもあります（そちらでは伝称筆者が阿仏尼となっています）。

(5) 伝二条為教筆「伊勢切」は、鎌倉時代末期から南北朝頃に書写された『続拾遺集』の断簡です。為教の筆跡ではありません。こちらも具引き地に文様を雲母摺りしています。文様は芭蕉や草戸です。展示では見えにくいと思いますのでデジタル画像を調整したものをここに掲出します。

展示品の裏面には、色紙や短冊が多く張り込まれています。すべての調査を終えた後、解説とともに公開する予定です。

(2024/09/07 記)

